

1. 授業の基本情報

本報告では教育学部で開講された「教育相談論」(前期、2単位)について、授業内での事例についての討論方法の変更を行った授業について対象とする。

本授業の最終回にて、受講生を対象として、教育相談論におけるオープンダイアログ的な討論方法の導入の試みについてのアンケート(自由記述、19問)をMicrosoft Formsを用いて行った。受講生176名に対し、24名の回答があった。

2. 授業評価の内容

回答結果について、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach, 木下, 2003. 以下M-GTA)を用いて分析を行った。分析テーマは学生が学校における問題行動に対応する討論に参加して苦慮して学ぶプロセス、分析焦点者は学校における問題行動に対応する討論に参加する学生とした。M-GTAの結果から、80概念と20カテゴリー、5上位カテゴリーを生成した。カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめて、簡潔に文章化(ストーリーライン)した。以下にストーリーラインの要約を示す。概念を『 』、カテゴリーを【 】と表記する。

学校における問題行動に対応する討論に参加する学生は【初期反応】として、【討論への抵抗】や【不安】を感じながらも、討論に『興味がある』『内容が気になる』ことから、『他者の意見が聞けそう』『楽しそう』といった【討論への関心】も抱いていた。

学生は事前に予習動画を見て、【基本原則から学ぶ】ことを行い、事例の相談対象の児童生徒について【慎重に考える】ことを行い、討論を行う中でも【立場に寄り添う】ことを行うことで、【考える姿勢】を身に着けている。

【討論】の中で、学生は【対面における討論の効果】を感じつつ、【役割を行う難しさ】や【討論の難しさ】を感じた。【リフレクション】では『意味のないリフレクション』になることもあるが、『リフレクションでの教師』

を見て、教師同士の考えの違いや教師のあるべき姿を感じることもあり、『有効なリフレクション』で話し合いの振り返りができていると感じていた。また【書記の役割】について感じていた。

このような討論を行う中で、基本原則で学んだ『「しんどい」は人によって違う』ことを活用し、『他者の考えを知る』ことや『他の班との共有』から『自分と異なるものを知ることの大切さ』といった【他者を知る】ことを行い、教師の役割を行う中では『教師として子どもに行うこと』を考え、子供や保護者との『繋がりを考える』、『教師としての対応』を模索するといった【教師ができること】を学んだ。【対応のあり方】について『対応は様々』との前提を持って、『たくさんの意見を取り入れる』ことで『みんなの意見を含めた解決方法』を考え、【対応の学習】として『保護者との連携の必要性』や『臨機応変な対応』が大事と感じ、『対応を考えることの学習』となったと感じた。【討論の意義】として『話を聞く』ことから始め、質問や対応など『討論に努めたこと』で学び、『話し合いの重要性』を感じて『活発な話し合い』となった者もいたので、『座学ではない』と感じ、『学びが深まる』『座学ではない』『スキルの獲得になる』と感じ、実際に『事例を深く学ぶ』ことや『一週間空くことの意義』を感じ、『楽しい時間』となって、【得るもの】があり、学生が【学習されたこと】があった。

【今後に向けて】、【感想がない】者や、討論があることを『辛かった』、『席の位置』で話しづらかったり、『戸惑い』や『同じような意見』が多い、『架空の話を作っていることや『二週目の討論の課題』があり、『討論しにくい』という【課題】があり、学生は【改善案】も提案していた。

3. まとめ

討論方法の変更により、学生の教育相談に対する理解が進んでいるが、課題もあり、さらなる改善が必要と考える。